

産官学のフューチャープラン ▼ 374 岩手県 第13回 WING 最北端で成長する樹脂加工企業 建屋増設で生産 キャパを倍増



高橋福巳氏

(株)WING（岩手県北上市）は「最先端機械と人間の融合」を経営戦略に掲げ、新技術で新たな価値創造を目指している精密プラスチック製品の加工メーカーだ。1999年12月に設立され、2000年1月に操業を開始して以来、日本最北端で樹脂加工を行えるメーカーとして、岩手および東北エリアの半導体産業を支え続けている。

「創業時は花巻市の起業家支援施設に入居させていただき、各種コーディネーターや専門アドバイザーの方々に手厚い支援をいただいた。事業拡張に向け、04年12月に現在地に新工場を建設し、半導体業界から多く仕事をいただけるようになった。現在は、液晶製造装置、電子部品、自動車、医療機器など多岐にわたるユーザーにプラスチック部品を提供させていただいている」と語るのは、同社を牽引する代表取締役社長の高橋福巳氏だ。

同社における分野別の売上構成は、半導体が60%、残り40%は電子部品、医療機器、液晶、各種製造装置部品および保守部品が4等分という比率。半導体向けは、製造装置および検査装置向けとデバイスマーカーの工場向け保守・設備という構成になっている。なかでも、CMP装置用の精密重要部品を数多く製造している。

もともと塩ビの溶接からスタートしたように、同社が得意とするのが「プラスチック溶接」だ。多種多様な工作機械を駆使した精密切削部品と、人が作り出す手作業のノウハウを駆使したモノづくりの融合によって、常に完成度の高い製品を生み出している。「半導体製造装置向けの部品に求められる品質、精度、材料の知見といったノウハウを基盤として、樹脂部品の加工に加えて、曲げ、溶着、溶接などの高度化に対応している。特に、サイズが大きい丸棒や形状が複雑なものなどに力を入れている」（高橋氏）。

岩手県内では、半導体製造装置メーカーやデバイスマーカーが生産拠点を増やしているため、これに応じて同社も増産対応を順次進めている。3年前から第1工場組立棟の増築や増産対応の設備およびCAD／CAMの導入を準備し、25年9月に完成させた。これにより、既存の第1工場と第2工場に増設部分の2階建て1300m²が加わり、作業エリアは従来の2倍に拡張された。新たに設備5機の導入が可能になり、生産能力を現有の150～200%まで高めることができるようになった。

「半導体業界の成長が続くなか、当社の課題は生産キャパシティーの拡大にある。増設部分の組立棟では現在、新規採用者の技術向上と新規導入した設備の立ち上げを推進中。溶接工は現在40人いるが、4月には当社として初めて、外国人特定技能エンジニアリング人材を2人採用することが決まっており、増員の準備を進めているところだ」（高橋氏）。

並行して、人材の確保と育成にも力を入れている。「さらに働きやすい環境を整えていくため、今回の増設を機に工作機械を置いてあるエリアと溶接エリアをきちんと分離したほか、休憩ルームやトイレもきれいに整備した。自社仕様の生産管理システムなどにも積極的に投資しており、樹脂加工メーカーという言葉から受けるイメージを覆すような環境づくりを今後も進めていく。また、30代の管理職候補者への教育研修にも着手する」（高橋氏）方針で、これからWINGは次の成長に向けて大きな変革期を迎えるそうだ。

こうした一連の取り組みを通じ、岩手県のさらなる発展や産業集積にも貢献していく。地域未来牽引企業に選定されている同社は、これまで産学連携や国際リニアコライダー（ILC）の誘致活動などに参画し、ILC関連では3社共同で特許も取得している。「岩手は、半導体だけでなく電子部品や自動車の産業集積地でもあり、県内からの人材流出はもちろん、県外および海外からの人材確保が急務だ。そのなかで、いわて半導体関連人材育成施設『I-Spark』が設立された。いわて半導体関連産業集積促進協議会『I-SEP』の活動とともに、技術・人材の育成と集積、技術力の高度化促進に大きく期待しており、当社も貢献したい」（高橋氏）。

同社も、将来的にAIの活用や自動化による生産効率の向上を企図している。だが、その前に「まずは生産能力の強化で競合よりも一歩先を行く技術的・価格的な優位性を確保しつつ、収益性の向上に努めたい。そう遠くないうちに人型ロボットが登場するとみており、当社がAIや自動化に取り組むのはそのタイミングになるだろう」と語る高橋氏は、すでに次なる最先端機械と人間の融合を視野に入れているようだ。

（特別編集委員 津村明宏）